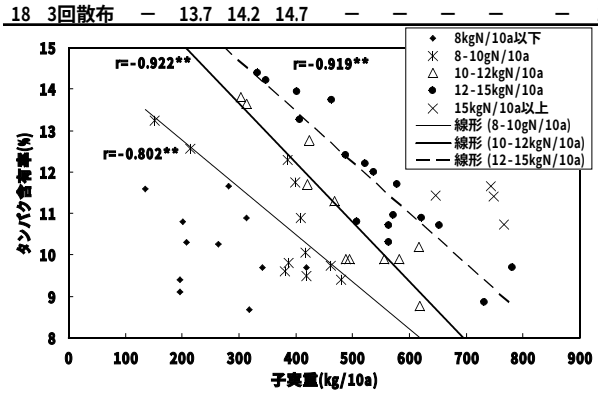
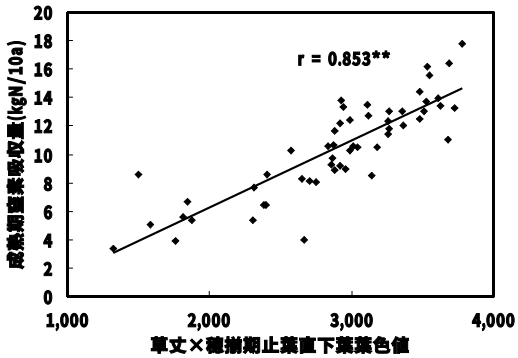
成績概要書（2007年1月作成）

－－－

表 1. 各基肥窒素量水準に対する尿素葉面散布散布時のタンパク含有率(%)

年	試験場所	上川農試				美瑛町				士別市				
		基肥窒素量(kgN/10a)												
次	散布回数	6	9	12	15	6	9	12	15	6	9	12	15	平均
H	無散布	8.8	8.9	9.7	―	9.9	10.7	11.4	―	9.4	9.9	10.2	―	9.9
15	2回散布	9.2	9.4	10.2	―	10.7	11.0	11.7	―	10.3	10.5	10.8	―	10.4
H	無散布	―	10.3	―	―	―	9.9	―	―	―	9.9	―	―	10.0
16	2回散布	―	10.7	―	―	―	10.9	―	―	―	11.3	―	―	11.0
H	無散布	9.7	10.3	11.0	11.4	9.5	9.9	10.7	―	9.6	9.9	10.8	―	10.3
16	3回散布	11.2	11.4	12.2	12.8	11.3	11.6	12.3	―	11.2	11.9	12.3	―	11.8
H	無散布	9.8	10.9	11.9	12.4	9.7	10.1	11.4	12.0	10.3	10.9	11.8	12.3	11.1
17	3回散布	11.1	11.9	12.9	13.5	11.2	11.5	12.5	13.2	11.5	12.0	12.3	13.2	12.2
H	無散布	―	12.8	13.3	13.9	―	―	―	―	―	13.8	―	―	13.4
18	3回散布	―	13.7	14.2	14.7	―	―	―	―	―	13.6	―	―	14.0





左図 1. 成熟期窒素吸収量別の子実重とタンパク含有率の関係(平成 15-18 年、n=54 、上川農試、士別市、美瑛町、葉面散布無散布区)

右図 2. 穂揃期の草丈×止葉直下葉の葉色値(平成 15-18 年 n=54、上川農試、美瑛町、士別市、葉面散布無散布区)

表 2. 穂揃期の生育と窒素吸収量、子実重、タンパク含有率との相関係数

項目	n=	草丈(cm)	止葉直下葉葉色値	穂数(本/m²)	草丈(cm)×葉色値
穂揃期窒素吸収量(kg/10a)	40	0.769**	0.771**	0.421**	0.878**
子実重(kg/10a)	55	0.716**	0.733**	0.656**	0.805**
タンパク含有率(%)	55	0.088	0.103	-0.327*	0.119
成熟期窒素吸収量(kg/10a)	54	0.795**	0.699**	0.479**	0.853**

(平成15-18年、上川農試、美瑛町、士別市。平成15は穂揃期窒素吸収量未調査)

表 3. 推定粗子実重別の穂揃期生育診断による追肥要否基準

生育診断値 穂揃期の草丈(cm)×止葉直下葉葉色値	推定粗子実重水準(kg/10a) 200－400	400以上
3300以上	追肥不可	
2800-3300	不可	推奨
2500-2800	追肥推奨	
2500以下	要追肥	

*要追肥：ﾀﾝﾊﾟｸ含有率が低いため、開花期以降一週間間隔で2%尿素葉面散布を3回行う。追肥推奨：ﾀﾝﾊﾟｸ含有率におおむね問題はないが、収量向上を目的とした追肥を推奨する。追肥不可：ﾀﾝﾊﾟｸ含有率が高い、または倒伏助長の危険性があるため、追肥は行わない。200kg/10a以下の場合本要否基準は適応できない。*子実重は過年度の実績等から推定する。

生育診断の手順

測定時期：穂孕期～穂揃期（ほぼ全ての穂が出穂を見た日）。
測定場所と個体数：圃場中の生育中庸な場所で、10穂以上。
調査項目と方法：草丈(cm)　地面から垂直に伸ばした**止葉の先端まで**の高さを測定する。
葉色値　ミノルタ葉緑素計SPAD-502を用いて、止葉の1枚下の葉の中助を避けた葉の中央部を測定する。葉の黄化部分は避け、健全な緑色部分で測定する。

図 3. 生育診断の手順

4．成果の活用面と留意点

1)本試験は上川管内の春まき栽培での試験結果である。

2)本試験は褐色森林土、褐色低地土、グライ土で行われたものである。

3)上位葉の黄化症状が著しい場合、葉面散布効果が低い可能性がある。

5．残された問題とその対応

1）黄化症状と葉面散布効果の関係についての検討。

2）タンパク含有率が高水準の場合の施肥対応。